大坂船場北部地区の街区構成寸法の復原について

近世大坂城下町の構成と形成過程に関する研究 その4

ON THE RESTORATION OF BLOCK SIZE OF NORTH SENBA AREA

A study on the town planning and formation of Osaka Castle town Part 4

松口輝久*, 吉田高子**

Teruhisa MATSUGUCHI and Takako YOSHIDA

In this study, We analyzed the town size and the block planning of the north Senba area, through the “Mizucho Ezu”, the restoration of “Mizucho” and the “MinyuChizu”.

In the Senba, the drainage area was separated 3 districts. The boundary street was Fushimi-machi and Karamono-machi.

In early stage of development of the Senba area, the inside measurement of the block was 42ken from south and north. It was equal to the inside measurement of the block from east and west.

Keywords : North Senba area, drainage area, restoration of “Mizucho”, town size, square patern, Karamono-machi

船場北部地区, 排水経路, 『水帳』復原図化, 町境間寸法, 正方形街区, 唐物町

1. 序

前稿¹⁾では, 明暦期前後の船場全域の町割構成について『新板大坂之圖』・『大坂三郷町絵図』²⁾により考察し, 1町単位で成立していた本町以北と, 2町単位で構成された北久太郎町以南の町割構成の違いを指摘し, それらは本町～唐物町を調整区域として, 丁目境の位置の違いとなっていて残っていることを示した。

また, 『水帳絵図』・『民有地図』記載寸法により, 船場の北久太郎町以南から島之内の九之助町迄の街区構成寸法は, 街区東西真々寸法が45間 (= 街区東西内法寸法42間 + 南北街路幅3間の半幅×2), 街区南北真々寸法が44.5間 (= 敷地奥行寸法20間×2 + 背割下水道幅0.5間 + 東西街路幅4間の半幅×2) と復原した。

さらに, 船場南部地区及び島之内の九之助町以北の町の成立時期を慶長三年(1598)から慶長五年(1600)頃と推定した。

本稿では, まず船場全域の下水道の配備状況を復原し, その排水経路について考える。

つぎに, 船場北部地区(大川沿いの道～唐物町)について, 『水帳絵図』・『水帳』復原図化により, 町割・敷地割構成及び南北町境間寸法を検討し, これに『民有地図』記載寸法を加えて, 街区構成寸法を復原する。

さらに, 船場における町割, 下水道排水経路, 街区構成の違いから判明する初期船場の領域を復原し, その成立時期について考察を試みる。

2. 船場の下水道配備状況の復原

1) 下水道の種類

船場全域には, 「太閤下水」と通称される計画的な下水道が敷設されていたことが知られている。

図-1は, 『水帳絵図』に記された下水道位置とその幅を示したものであるが, つぎのように分類できる。

① 東西方向背割下水道(「町境除地水道」)

船場においては, 敷地裏側に「町境除地水道」として東西方向の背割下水道が配備されており, 西方へ流れる形式となっている。

下水道幅は, 平野町～安土町の4町が3尺1寸となっているが, 道修町以北の下水道の下流部では4尺～6尺と幅広くなっている。

② 南北方向下水道(「町境除地水道」)

七郎右衛門二丁目には西横堀川沿いの南北方向の片側町であり, 背割下水道が南北方向に配備されている。

下水道幅は北方では4尺であるが, 南下した御霊宮あたりでは1間5尺5寸と広がっている。南端の五幸町では, 1丈2尺2寸にもなっており, 順慶町と博労町の間で合流し, 3間幅の排水口から西横堀川へ流出させている。このように, 西横堀川沿いの南北方向下水道は, 東西方向背割下水道を合流し, 西横堀川へ排水する経路としても重要な役割を持っていたことが分かる。

③ 町境小路内下水道(「小路内水道」)

町境の小路には, 浮世小路(小路幅は1間1尺程度)及び本町北小路と本町南小路(小路幅はいずれも5尺)などがあるが, 浮世小路と本町北小路では小路両側に側溝形式の下水道, 本町南小路では

* 守口市役所都市整備部 工修

** 近畿大学理工学部建築学科 助教授・工博

Dept. of Urban Arrangement, Moriguchi City office, M. Eng.

Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Science and Technology, Kinki Univ., Dr. Eng.

小路中央に「板蓋水道」が設けられている。

④ 南北街路内下水道（「大道内水道」）

「大道内水道」は、南北方向の街路内両側に側溝形式で設けられた下水道で、東西方向の下水道を南北に連結し、排水に導く形式となっている。『水帳絵図』では、淡路町二丁目・三丁目境となる中橋筋、南久太郎町と順慶町の四丁目・五丁目境となる井池筋に「大道内水道」が確認できる。

中橋筋は、明暦期の『大坂三郷町絵図』に「大溝筋」と記されており、井池筋も南下すると「大溝筋」と呼ばれ、これらの筋における「大道内水道」の存在を示している。また、その溝幅は2尺3寸～2尺9寸と広いものであった。

⑤ その他（「除地水道」・「屋舗内水道」）

「除地水道」として、町境とならない位置にも下水道が配備されている。安堂寺町四丁目と塩町四丁目では町中を南北方向に下水道が通っている。この位置はある時期における町の西端を示すものではないかとも考えられ、安堂寺町・塩町の背割下水道の西端をこの南北方向の下水道で合流させ、幅6尺の排水溝で西横堀川に流出させている。

「屋舗内水道」は、安堂寺町・升屋町に見られるもので、心斎橋筋側の屋敷地内に下水道が通っている。

2) 下水道の配備状況

船場は『水帳絵図』の残存数が少なく、『水帳絵図』のみで船場全

域の下水道の配備状況を復原することは難しい。そこで、寛文初年の『大坂町中並村々絵図』⁹⁾により不足箇所を補い、さらに、敷地割に加えて下水道の配備状況が詳細に示されている明治期の「地籍地図」⁴⁾により、南北方向の敷地割境界と街区内部における下水道の配備位置の検討を加えて作成したものが、図-2の下水道配備状況復原図（江戸期）である。

この下水道配備状況復原図により、船場の下水道配備状況を見ると、船場は同じ排水経路を持つと考えられる3地区に分けることができる。それは、船場北部地区の中で北浜通り～高麗橋筋、道修町～南本町⁹⁾の2地区に分かれ、さらに船場南部地区の北久太郎町～塩町に分かれる。

これら排水経路の異なる3地区は、町割の違いと同様⁹⁾、町の成立時期の違いを示すのではないかと考えられる。また、心斎橋筋以西の下水道の乱れも、町割や街区構成の乱れと同様、津村・上難波村などの町場化の遅れによるものと推察できる。

3. 『水帳絵図』による船場北部地区の街区構成寸法

船場北部地区において、『水帳絵図』が現存する町⁷⁾は、20町⁸⁾であり、『水帳』のみが現存する町は8町⁹⁾で、合わせても全77町⁸⁾の36%にすぎない。

図-3の船場北部地区町割・敷地割復原図は、『水帳絵図』の現存

図-1 『水帳絵図』による下水道と下水道幅（単位：尺）

図-2 江戸期の下水道配備状況復原図

する町と『水帳』を復原図化した町を繋ぎ合わせ、『大阪市地形図』¹⁰⁾により角度を調整して『大阪実測図』¹¹⁾に載せ、補正したものである。

この図によると、基本的に船場北部地区の町は城に向かう東西方向の街路に間口を面した両側町で形成されていることが分かるが、西横堀川に沿った町では間口が南北方向の街路に面している。

また、北浜通り、今橋筋、浮世小路、高麗橋筋の東西方向の街路は、下流に向かうにしたがい北側へ振れている大川の川筋に沿って同様にやや北へ振れている。

遅れて成立したとされている伏見町¹²⁾は、その振れの隙間に入り込んだ形の町となっている。

図-4は、『水帳絵図』記載の間口寸法と『水帳』の敷地割復原図化による間口寸法の合計を示したものである。前述した大川の川筋の影響による地形的制約のため、数値にばらつきが見られる伏見町

以北の地域を除いた範囲で、街区東西内法寸法を各筋間ごとの平均で見ると、一丁目筋～八百屋町筋が41.93間、八百屋町筋～堺筋が42.07間、難波橋筋～中橋筋が42.08間、三休橋筋～井池筋が42.03間、井池筋～心斎橋筋が42.03間となり、ほぼ42間の値が得られる。この値は前稿で明らかにした船場南部地区とは共通する値であるが、これと復原されていた船場の街区東西内法寸法40間とは大きく異なるものであることが分かる。

堺筋～難波橋筋が41.75間、中橋筋～三休橋筋が41.71間となっているが、これは難波橋筋と中橋筋を南北に走る大溝(街路内両側溝)により街区東西内法寸法42間が狭められたことが考えられる。

その他、箆屋町筋～一丁目筋は38.14間、心斎橋筋～御堂筋は42.41間、御堂筋～佐野屋橋筋は42.11間、佐野屋橋筋～渡辺筋は42.17間となっている。御堂筋以西については地形的制約及び北御堂の立地

図-3 船場北部地区町割・敷地割復原図

などにより乱れが見られる。

図一5は、『水帳絵図』と『水帳』復原図化による敷地奥行寸法を示している。これにより敷地奥行寸法を見ると、今橋一丁目の北側と伏見町通りの呉服町・道修町通り西方の古手町では、地形的な制約のため寸法が定まらない。

上記以外の範囲でその平均を見ると、船場北部地区の中心をなす道修町～備後町では敷地奥行寸法は20.25～21間と一定せず、いずれも20間より大きな値となっている。つまり、敷地奥行寸法について

図一4 街区東西内法寸法 (単位: 間)

図一6 東西街路幅 (単位: 間)

図一5 敷地奥行寸法 (単位: 間)

図一7 南北街路幅 (単位: 間)

えられてきたように均質なものでなく、唐物町を挟んで船場北部地区と船場南部地区に違いのあることを裏付けるものでもある。

図一六は東西街路幅を示しているが、各通りごとにその平均を見ると、本町通りが5.28間とかなり大きく、その他は3.71～4.30間の間に分布している。また、道修町～安土町に限ると、3.98～4.13間の間に集中している。

つぎに、図一七は南北方向の街路幅を示しており、各筋ごとの平均を見ると、碁屋町筋が3.56間、西堀浜通りが5.13間であるが、一丁目筋～渡辺筋は2.78～3.05間の間に分布している。

背割下水道幅は、既述のように道修町～安土町では、0.47～0.49間の間に集中している。

4. 船場北部地区の街区構成寸法の復原

1) 『水帳絵図』・『水帳』復原図化による街区構成寸法

『水帳絵図』と『水帳』復原図化によって知られるのは、敷地奥行寸法・間口合計寸法・街路幅・下水道幅などであり、これらにより、南北方向の町境間寸法と街区真々寸法が求められる。

① 南北方向の町境間寸法

南北町境間寸法は、

北側町境背割下水道半幅＋北側敷地奥行寸法＋東西街路幅
＋南側敷地奥行寸法＋南側町境背割下水道半幅

で求められるが、道修町～安土町の範囲は、敷地奥行寸法が20間～21間と1間の差があり、安定した数値が得られない。そこで、敷地奥行寸法が20間である本町一丁目、20.5間である平野町一丁目、21間である淡路町二丁目についてそれぞれ南北町境間寸法を見ていくことにする。

本町一丁目は、図一八に示すように、敷地奥行寸法は船場南部地区と同じ20間であるが、町境小路で下水道を持つ北小路と南小路は共に0.77間、東西街路幅（本町通り）が5.275間と広いため、南北町境間寸法は46.05間の値となる。

平野町一丁目は、図一九に見るように、北側背割下水道幅が0.46

図一八 本町一丁目『水帳絵図』復原図（単位：間）

図一九 平野町一丁目『水帳絵図』復原図（単位：間）

図一〇 淡路町二丁目『水帳絵図』復原図（単位：間）

間、北側及び南側敷地奥行寸法が20.5間、東西街路幅（平野町通り）が4間、南側背割下水道幅が0.46間で、南北町境間寸法は45.46間となる。

淡路町二丁目は、図一〇のように、北側背割下水道幅が0.46間、北側及び南側敷地奥行寸法が21間、東西街路幅（淡路町通り）が4間、南側背割下水道幅が0.47間となっており、南北町境間寸法は46.465間となる。

このように、南北町境寸法は45.46間、46.05間、46.465間と不揃であり、いずれも南北町境寸法44.5間を基本とした船場南部地区の計画とは異なっていることが分かる。

② 南北方向の街区真々寸法

南北町境寸法に乱れが見られる平野町と淡路町について、街区南北真々寸法を検討するとつぎのようになる。

東西街路半幅（平野町通り）2間＋平野町南側敷地奥行寸法20.5間＋平野町・淡路町町境背割下水道幅0.46間＋淡路町北側敷地奥行寸法21間＋東西街路半幅（淡路町通り）2間＝45.96間

となり、道修町～安土町の街区南北構成寸法は、敷地奥行寸法・南北町境間寸法の違いにかかわらず、真々寸法は46間であったことが推察される。

③ 東西方向の街区真々寸法

街区東西真々寸法は、

間口合計寸法（街区東西内法寸法）＋東側南北街路半幅
＋西側南北街路半幅

で求められ、一丁目筋～心斎橋筋の範囲では、街区東西内法寸法は42間、南北方向街路幅は3間で、街区東西真々寸法としては45間が復原できる。

2) 『民有地図』による街区真々寸法

表一は、『民有地図』による東西方向の街区真々寸法を示しており、横軸のアルファベットは南北の筋（例：E一堺筋）、縦軸の番号は東西の通り（例：14一本町通り）を表している。

安定した数値の得られる道修町以南で、街区東西真々寸法の筋ごとの平均を6尺5寸＝1間¹³⁾に換算して見ると、一丁目筋～八百屋町筋で45.30間、八百屋町筋～堺筋で45.17間、堺筋～難波橋筋で45.16間、難波橋筋～中橋筋で45.53間、中橋筋から三休橋筋で45.35間、三休橋筋～井池筋で45.44間、井池筋～心斎橋筋で45.30間となり、八百屋町筋～心斎橋筋の範囲では45.30間となる。

表二は、南北方向の街区真々寸法で、碁屋町筋～心斎橋筋の範囲で、街区南北真々寸法の通りごとの平均を同様に6尺5寸＝1間に換算して見ると、道修町～平野町で45.91間、平野町～淡路町で45.96間、淡路町～瓦町で46.27間、瓦町～備後町で46.31間、備後町

表一 『民有地図』による街区東西真々寸法 (単位: 間, 縦軸: 通り, 横軸: 筋)

	M-N	L-M	K-L	J-K	I-J	H-I	G-H	F-G	E-F	D-E	C-D	B-C	A-B
1	53.85	56.65	43.36	40.22	50.51	49.85	49.77	49.8	53.42	62.79	37.71		
2		55.3	43.71	50									
3	50.96	49.34	49.73	49.79	50.16	48.92	49.63	49.39	49.2	57.87	48.23		
4	44.1	49.21	49.37	49.41	50.35	48.44	49.92	49.17	48.41	50.56	48.1	22.7	
5	42.2	49.05	49	49.47	49.9	48.59	49.78	48.61	48.3	49.88	51.7	27.22	
6	40.1	49.04	48.81	49.55	49.61	48.52	49.56	48.16	49.21	49.31	49.83	39.9	
7	35.27	49.15	49.08	49.15	49.34	48.66	48.96	48.55	49.4	48.9	47.47	35.4	
8	30.52	49.15	49.46	48.89	48.67	48.85	48.92	49.11	48.27	48.86	47.48	37	
9	29.81	45.11	49.61	48.51	48.23	48.77	49.19	48.88	48.56	48.62	49.69	38.36	
10	37.16	32.97		61.08	48.4	48.74	49	49.37	48.18	48.76	48.96	41.94	
11	35.72	38.8	43.26	51.19	49.2	48.87	48.78	48.98	48.79	48.46	49.26	44.55	
12	39.5	79.23		49.45	49.09	49.17	49.34	48.87	48.77	48.57	49.6	47.1	
13	40.16			50.22	48.82	49.51	49.43	49.09	49.25	48.95	49.67	49.6	
14	40.8	32.41	48.38	49.62	49.89	49.93	48.88	49.89	49.68	49.55	48.63	51.43	
15	40.61	21.3	48.06	49.98	49.71	49.74	49.09	50.04	49.5	49.24	49.28	50.11	
16	40.48		47.85	49.42	49.67	49.5	49.54	49.64	49.34	49.39	49.09	49.13	45.27

表二 『民有地図』による街区南北真々寸法 (単位: 間, 縦軸: 通り, 横軸: 筋)

	N	M	L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	A
1-2	24.91	34.82	37	35.77	27.81									
2-3	29.98	24.47	23.78	23.96	24.12	45.94	39.51	39.1	36.44	34.34	22.7	12.66		
3-4	49.19	47.97	48.47	48.38	48.51	47.86	47.99	48.37	49.14	45.8	39.87	36		
4-5	22.65	23.62	23.82	23.59	23.61	23.42	23.95	24.03	24.27	23.88	23.7	23.41	23.29	
5-6	23.59	24.49	24.07	24.11	23.78	24.47	24.41	24.4	24.8	24.41	24.32	24.32	24.9	
6-7	47.36	46.82	46.57	45.5	44	41.61	39.86	37.95	35.84	36.5	38.92	35.23	33.49	
7-8	47.07	45.61	44.76	43.03	41.65	39.95	39.22	37.6	36	31.93	26.01	26.1	25.97	
8-9	40.8	42.04	42.97	45.69	48.17	49.71	49.81	49.61	50.05	49.88	49.71	49.66	49.48	
9-10	54.15	55.13	55.15	49.4	48.92	49.31	49.67	49.84	50.06	50.22	49.99	49.73	49.52	
10-11	48.13	49.31	45.85	49.9	50.18	50.28	50.36	50.27	50.25	50	49.8	49.66	50.35	
11-12	45.34	44.14	50.17	49.39	50.36	50.37	50.35	50.35	50.38	49.9	50.2	49.99	49.85	
12-13	52.12	52.69		52.03	51.76	51.44	51.13	50.69	50.26	49.98	49.9	49.67	49.76	
13-14	50.64	50.88		50.26		50.13	50.24	50	49.99	50.46	50.02	49.92	49.89	
14-15	50.77	50.42	50.43	50.31	50.32	50.54	50.53	50.47	50.55	50.19	50.67	50.65	50.91	
15-16	34.35	33.94	33.75	33.21	32.38	32.14	31.64	31.49	31.48	31.33	31.33	31.31	31.33	
16-17	34.7	35.42	35.92	36.85	38.05	38.6	39.25	39.71	39.84	40.2	39.99		39.29	39.29

～安土町で46.48間, 安土町～本町で46.23間, 本町～南本町で46.67間となり, 道修町～南本町の範囲では46.25間となる。

以上, 『民有地図』で得られた東西が八百屋町筋～心斎橋筋・南北が道修町～南本町の範囲の街区東西真々寸法45.30間, 街区南北真々寸法46.25間は, 先に『水帳絵図』で求めた値とほぼ一致することが分かる¹⁴⁾。

3) 道修町から南本町の街区構成寸法

『水帳絵図』と『水帳』復原図化及び『民有地図』により, 船場北部地区のうち, 安定した寸法の得られる道修町～南本町(一丁目筋～心斎橋筋)の街区構成寸法を復原すると, 街区東西内法寸法42間, 街区東西真々寸法45間, 街区南北真々寸法46間, 東西街路幅4間, 南北街路幅3間, 背割下水道幅0.5間が得られる。

また, 街区南北内法寸法は, 街区南北真々寸法46間から東西街路幅4間を減じたもので42間となり, 街区東西内法寸法と等しくなることが分かる。

この復原した街区は, 図-11に見るように, 街区形状を正方形としたもので, 方42間の内法寸法に東西方向の街路(町通り)幅4間, 南北方向の街路(筋)幅3間を加えるという手法を採っていることが判明した。

船場・島之内の街区構成寸法について, これまでの研究では, 藤田元春氏の街区形状寸法を方40間(1間=6.5尺)とする説¹⁵⁾があり, 現在でも広く受け入れられており一般化している¹⁶⁾。この説は, 敷地奥行寸法を20間とし, 背割下水道幅を考慮せず, 単純に2倍して街区南北内法寸法40間を算出し, 正方形街区という仮定に基づき街区東西内法寸法も40間として, 方40間の街区形状寸法を導いたものと推測される。

また, 佐古慶三氏は, 『水帳』・『水帳絵図』を詳細に分析し, 街区

真々寸法方45間(1間=6.5尺)としているが¹⁷⁾, これは, 船場の順慶町以南及び島之内という限られた範囲での検討のため, 島之内における町割方向の転換を考慮せずに, 東西方向に街路に面する町と南北方向に街路を面する町の街区から真々寸法方45間を算出したものと考えられる。

この両氏の説は, 船場・島之内の街区形状が共に等しく正方形であり, 街区構成寸法も同様であるという推測に立脚している。

しかし, ここでは街区構成寸法を復原することにより, 船場の街区における地区的違いは, その寸法の違いのみに止まらず 街区形状寸法方42間の正方形街区という街区形状を優先させて計画された地区(船場の道修町～南本町)と, 基本的には正方形街区にはこだ

図-11 町割・街区構成復原図 (単位: 間)

わず敷地奥行寸法20間を基準として計画された地区（船場の順慶町～島之内の九之助町）とに分かれ、その街区の計画基準に相違のあることが判明した。

近世城下町に一般化するとされている正方形街区と敷地奥行寸法20間の組み合わせは¹⁸⁾、大坂船場においては正方形街区の構成と敷地奥行寸法20間の成立は、それぞれ異なる計画意図に基づいて形成されたものであると考えられる。

それは、内法寸法方42間の正方形街区で構成することを計画の基本とし、その街区内に背割下水道を設けるという形から、敷地奥行寸法20間を計画の根本に置き、これに背割下水道幅を加えることにより街区寸法を算出するという形への計画基準の転換として捉えることができる。

5. 初期船場の領域と唐物町の成立

初期船場の成立時期とその領域については、これまでの研究によると、内田九州男氏は慶長三年の「大坂町中屋敷替」に際して船場の開発が行われ、その範囲を北は道修町、南は南北久宝寺町の境辺り、東は東横堀川、西は心斎橋筋としており¹⁹⁾、伊藤毅氏は天正期から慶長期にかけての船場の範囲として、北は道修町、南は順慶町、東は東横堀川、西は心斎橋筋としている²⁰⁾。

この両氏の説は、町名の分析と後に町場化されていく周縁部の考察からの遡及による初期船場の領域の推定であるが、その都市構成要素（街区構成、下水道設備状況、町割・敷地割）そのものについては触れられておらず、よってつぎの展開となる第二期船場との関係についても明らかにされていない。

船場は先に述べたように、町割構成・下水道排水経路・街区構成寸法の違いにより、唐物町を挟み南本町以北（船場北部地区）と北久太郎町以南（船場南部地区）の2地区に分けることができる。

北久太郎町以南については、前稿²¹⁾で示したように慶長三年から慶長五年頃迄には成立していたことが判明している。

そこで南本町以北について文献に現れる町名を見ると、瓦町は、『言経卿記』²²⁾天正十五年閏十一月十八日の条に、「一、大坂町瓦町ニ河林越後守後室崩漏之由」平野町は、『言経卿記』²³⁾天正十六年閏五月三日の条に、「一、大坂平野町、妻、産前相煩之由一書有之間」道修町は『輝元公上洛日記』²⁴⁾天正十六年七月二十日の条に、「寅刻尔道匠(修)町に火事有之家貳拾者可り焼失候」という記載がある。

また、安土町についても『大坂惣末寺由緒書』²⁵⁾に、

西 安土町三丁目 浄安寺誓願

一 天正年中於東成郡大坂安土町開基了誓文禄四年寺号御免慶長三年大坂町中屋敷替之時此所へ移

とあり、浄安寺は天正年中に安土町に開基され、慶長三年の「大坂町中屋敷替」時に、安土町三丁目に移転されている。

これらにより、天正期には瓦町、平野町、道修町の存在が確認でき、安土町の天正期、少なくとも慶長三年以前には存在していたことが分かる。

また、本町については、『当代記』慶長五年の記載²⁶⁾が初見であるが、上記の町とおなじ町割構成、下水道排水経路及び街区真々寸法

が求められることより、道修町～南本町（東横堀川～心斎橋筋）の範囲は、天正期には成立していたものと考えられ、その範囲こそが初期船場の領域であると推察される（図-12）。

さらに、この初期船場の領域と第二期船場の領域とを繋ぐ位置に存在する唐物町の成立について、考えていくことにする。

唐物町は、初期船場の南端である南本町と、第二期船場の北端である北久太郎町に挟まれた町であるが、図-13に見るように他の町に比べて敷地奥行寸法が極端に小さく、初期船場及び第二期船場の南北町境間寸法と比べ約半分の寸法となっている。これは、唐物町がいずれの計画からも外れていたことを示すものであろう。

また、初期船場の領域の南端の南本町辺りには、東横堀川が東側に約1ブロックずれる「本町の曲がり」と称される箇所が見られ²⁷⁾、この東横堀川の「曲がり」の南側に沿う形で唐物町の町通りが通っていることが分かる。

東横堀川の開削は、天正十三年(1585)に始まり²⁸⁾、文禄三年(1594)の総構堀の築造に際して本格的な工事が行われたものといわれている。文禄三年の本格的工事の行われる以前の東横堀川の「堀留まり」が、この「曲がり」であったと考え、この「堀留まり」の南側に接する通りに沿って町（唐物町）が拡張して形成されたものと推察される。

図-12 初期船場の領域復原図

図-13 唐物町三丁目上半【水帳】復原図（単位：間）

以上のように船場の都市構成要素の復原と町名の検討から初期船場は、天正十三年の東横堀川の開削に伴い開発され、ついで東横堀川の「堀留まり」の南側沿いに唐物町が形成され、慶長三年の「大坂町中屋敷替」時に第二期船場が開発されたことが推定される。

6. 小結

以上、『水帳』・『水帳絵図』及び『大阪地籍地図』・『大坂町中並村々絵図』などの検討により、つぎのことが知られた。

まず、船場の下水道配備状況の復原から、その排水経路により、船場は3地区に分かれる。それは、北浜通り～高麗橋筋、道修町～南本町、北久太郎町～塩町であり、これは町の成立時期の違いを示すものと推察され、町割・街区構成寸法の違いなどを加え、初期船場の範囲を道修町～南本町（東横堀川～心斎橋筋）と考えた。

つぎに、『水帳』復原図化・『水帳絵図』及び『民有地図』により、初期船場の街区構成寸法は街区内法寸法方42間を基準とする正方形街区構成で計画したもので、敷地奥行寸法は20間とはならないことが分かった。敷地奥行寸法20間と背割下水道幅を基準とするものは第二期船場に見られ、これは正方形街区とはならず、両者は計画段階において異なることが判明した。つまり、正方形街区から敷地奥行寸法20間を優先する寸法計画の転換が初期船場から第二期船場において行われたことが分かった。

さらに、『言經卿記』・『輝元公上洛日記』などの史料により、天正期には初期船場の町の存在が確認でき、東横堀川の「曲がり」と唐物町の町通りとの関連から、初期船場と第二期船場の境に位置し、南北町境間寸法が大きく異なる唐物町は、東横堀川の堀留まりに沿って成立したのではないかと推察された。

謝辞

本研究を進めるにあたって、伊藤毅助教授には貴重な御教示を頂きました。また、大阪大学経済学部経済史研究室には『水帳』の閲覧を快く許可されました。記して感謝の意を表します。

注

- 1) 松口輝久・吉田高子：「大坂船場南部地区の町割と街区構成について（近世大坂城下町の構成と形成過程に関する研究 その3）」、日本建築学会計画系論文報告集 No. 486, pp.177～186, 1996.8
- 2) 大阪市立博物館蔵
- 3) 『大坂町中並村々絵図』（国立国会図書館蔵）は、大坂三郷及び周辺の村々迄を収めた肉筆彩色の地図で、特に船場の下水道の配備状況を詳細に描いており、『水帳絵図』の記載とも一致することから信頼性も高く、また『地籍地図』（明治期）には暗渠化されたのか記されていない「大道内水道」（排水経路を見ていく上で重要となる下水道）も、『水帳絵図』の記載と同様、『大坂町中並村々絵図』には描かれており、寛文初年における下水道の配備状況及び配水経路を考察する上で貴重な地図であるといえる。
- 4) 船場における下水道のその殆どが町境（南北敷地境界）に配備された背割下水道であり、『市街及接続郡部大阪地籍地図』（吉江集画地籍地図編輯部編、1991）から南北敷地割境界と下水道の配備状況を復原することにより、『大坂町中並村々絵図』では判明しにくい下水道の街区区内における正確な位置及び振れの角度を調整することができる。

- 5) 森毅氏は「豊臣期から江戸期にかけての船場の考古学的調査」（『ヒストリア 第139号』、1993）で、背割位置を含む唯一の調査地6（平野町一丁目、道修町一丁目）において「現在の背割下水道位置に南北を画する敷地境が見つかった。背割下水の位置には豊臣期には溝はなく、江戸初期になって始めて東西方向の溝が確認されている。」と、調査地6のみで初期の船場全域に背割下水道がなかったとはいえないとしながらも、豊臣後期に船場の町割が施されたとしている。このことは、船場の形成が2期に渡って行われたことを示唆するものである。
- 6) 前掲「大坂船場南部地区の町割と街区構成について」で、町割構成については既に述べている。
- 7) 前掲「大坂船場南部地区の町割と街区構成について」の表1に『水帳絵図』の残存状況と所在を示した。
- 8) それは、梶木街・今橋1丁目・尼崎町1丁目・尼崎町2丁目・高麗橋3丁目・上人町・四軒町・大豆葉町・呉服町・七郎右衛門町1丁目・道修町5丁目・古手町・平野町1丁目・平野町3丁目・善左衛門町・淡路町2丁目・備後町3丁目・升屋町・本町1丁目・南久太郎町4丁目の20町である。
- 9) それは、高麗橋2丁目・道修町2丁目・道修町3丁目・百貫町・雨鍋屋町・本町4丁目・南本町4丁目・唐物町3丁目上半の8町である。
- 10) 『大阪市地形図』：縮尺1/2,500、大阪市総合計画局、1974年測量、1984年修正
- 11) 1886年
- 12) 内田九州男氏は、「大坂三郷の成立一市街地の形成を中心として」（『大阪の歴史』第7号、1982）で、伏見町・呉服町の地域の成立と伏見町人の大坂移住を元和五年（1619）としている。
- 13) 『民有地図』は1間＝6尺となっている。
- 14) 『民有地図』で得られた街区東西真々寸法45.30間、街区南北真々寸法46.25間と『水帳絵図』で復原した街区東西真々寸法45間、街区南北真々寸法46間とは0.25～0.30間の差が見られるが、1間当たりでは0.0056～0.0067間の違いで誤差の範囲と考えられる。
- 15) 『尺度綜考』（臨川書店、1929）
- 16) 宮本雅明氏は、「初期大坂の都市空間と都市デザイン」（『まちに住まう一大阪都市住宅史』、平凡社、1989）で、船場の町空間の構成を図化しており、その街区構成寸法は内法寸法で方40間となっており、この図がこれ迄捉えられてきた船場の街区構成の典型例と言える。しかし、方40間の正方形となる街区形状を優先させたため、街区南北内法寸法については背割下水道幅を敷地内に含めるか、敷地奥行寸法を20間より小さくするかでなければ40間とはならず、『水帳』で得られる寸法とは異なることは明らかである。
- 17) 「大坂昔時の地割を論ず」（『建築と社会』第19輯7号、1936）
- 18) 玉井哲雄氏は、「町割・屋敷割・町家―近世都市空間成立過程に関する一考察―」（『年報 都市史研究2 城下町の類型』、都市史研究会編、山川出版社、1994）で、船場において「四〇間四方の正方形街区に短冊形地割で両側町という近世城下町において普遍化する屋敷割・町割が実現したことになる。」としている。
- 19) 「大坂と堺」（『図説大阪府の歴史』、河出書房新社、1990）
- 20) 『近世大坂成立史論』、生活史研究所、1987
- 21) 注1と同じ
- 22) 『言經卿記 二』（『大日本古記録』、東京大学史料編纂所、岩波書店、1960）
- 23) 『言經卿記 三』（『大日本古記録』、東京大学史料編纂所、岩波書店、1962）
- 24) 『輝元公上洛日記』（『長周叢書』、第二十巻、長周叢書発行所、1892）
- 25) 『大坂天満御坊開基記』（『粟津家記録』大谷大学付属図書館蔵）
- 26) 『當代記』（『史籍雜纂 第二』、國書刊行會、1911）の慶長五年七月十五日の条に、「一本町筋橋 蒔田權助」とある。
- 27) 「27 大阪府」（『角川日本地名大辞典』、角川書店、1983）に、「まがりの起源は豊臣秀吉が東横堀川を開削したとき、現在の東区唐物町1丁目付近にあった寺を避けるために曲げたものと伝える。」とある。
- 28) 『大阪市史 第一』（大阪市、1913）に「大正十二年十二月二十日本市土木部工事中東横堀川末吉橋九之助橋間に於て「大坂橋・天正十三年乙酉年七月吉日」の銘ある擬寶珠一個を発掘せり、其由緒等未だ明ならず」とあり、場所は比定できないが、天正十三年には東横堀川に架かっていたと考えられる大坂橋の存在が確認できる。

（1996年9月9日原稿受理、1997年2月25日採用決定）